ドクダミ
（蕺草・毒矯・毒溜・十薬・重薬）

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地　須藤　健一

ドクダミ科ドクダミ属ドクダミ、国内では１属１種。五月雨に煙る梅雨時に、茎の先に白い十字形の花序をつける。４枚の白色の花弁のように見えるものは総苞、出べそのように突出している棒状の淡黄色のものが、花が集まった花穂。ひとつ一つの花に花びらも萼もない。あるのは雌蕊と雄蕊だけ。北側斜面など半日蔭地を好み、全草に強い特有の臭気がある。

筆者が小学生の頃、借家の便所は汲み取り式で、汲み取り口へは家の裏の幅半間ほどの路地を通らなければならなかった。その路地は両側を長屋の壁や裏塀に挟まれ、日が射すのは昼の一時だけで、じめっとした隠微な場所であった。しかしその反面、路地はまた子供たちの恰好の遊び場でもあった。「どくだみ」はそこで白い花を咲かせていた。「かくれんぼ」や「鬼ごっこ」で路地を通るとき、花に触れると臭気が立った。だからその草を「便所草」と呼んでいた。

独特の臭気があり、人によっては悪臭とも、また香草とも。北原白秋はその「どくだみの花のにほひ」に隣家の人妻俊子を重ね、その胸の内を詠った。

どくだみの花のにほひを思ふとき青みて迫る君がまなざし　『桐の花』

透き通るまでに青白いまなざしで迫る俊子、それを受け止めようとする白秋。二人の関係は「どくだみ」の花の「におい」という誰が嗅いでもそれと分かる「隠微」な関係であった。こののち白秋と俊子は、俊子の夫から姦通罪で告訴されることになる。

ドクダミは南斜面など日当たりがよく水はけのいいところでは見当たらない。反対に日当たりが悪く、少し湿ったようなところだと根絶できないくらいよく繁茂する。素手で引き抜こうと触るとなかなか臭いが落ちない。が、乾燥させるとその臭いが消える。ドクダミ茶である。花、葉、茎とも全草お茶になり、スーパーや直売所などで販売されている。白秋の時代や筆者の小学校時代と違い、カタカナの「ドクダミ」に隠微さは似合わないのかもしれない。

レモン（露﨑浩原図）